様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１８００１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2011～2015
課題番号：２３３１０１８４

研究課題名（和文）ベトナム教育改革の質的向上を支える授業研究ー日越地域間共同ー

研究課題名（英文）collaborative researchod lesson study to support qualitative improvement of the education reform in Vietnam

研究代表者
村上　呂里（Murakami, Rori）

琉球大学・教育学部・教授

研究者番号：４０２１９９１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,500,000円

研究成果の概要（和文）：ベトナムでは、教え込みから子ども中心主義への教育改革に取り組んでいる。本研究は、貧困問題や差別、学力問題や言語問題などの課題を抱える少数民族地域の小学校をフィールドとし、共通の問題を抱えた沖縄で培われた理論や実践に基づき、ベトナムの教育改革の質的向上に参加した。その成果については、日本語版『日本・ベトナム共同授業研究の歩み－教え込みから子ども中心主義へ』（明石書店、2015）とベトナム語版"Tu giao duc nhoi nhet sang giao duc tich cuc"（フォレスト社、2106）として刊行し、ベトナム側にも広く還元した。

研究成果の概要（英文）：Vietnam now works on education reform to change from inculcation to the principle of children- centered education .This collaborative research carried on the field of the elementary school of the minority area . This area is poor and has many problems including discrimination and prejudice and the scholastic ability difference problem. Okinawa region has teh same issues and carries on overcoming those issues. We accomplished the collaborative research about pedagogy to overcome regional disparities sharing the experianses of education eachother.

研究分野：教育学

キーワード：子ども中心主義　ベトナム　マイノリティ　沖縄　貧困　学力格差

１．研究開始当初の背景

ベトナムでは、未だに権威主義的教師像のもと教え込み型の授業が広く行われ、とりわけ言語問題や貧困・差別などの諸矛盾を抱える少数民族の児童生徒にとって教室は居心地悪く、学力格差がひらきやすい状況にあった。折しも 2015 年に向け、ベトナム教育訓練省は学習者中心主義 **lay hoc sinh lam trung tam** に立つ教育改革に取り組もうとしていた。本研究は、言語問題や学力格差等共通の課題を抱えてきた沖縄で育まれた実践知や知見を活かし、少数民族地域の課題に根ざした教育改革の質的向上に参加しようと企図した。

２．研究の目的

ベトナム少数民族地域と沖縄は、国民国家への〈包摂〉と〈排除〉をめぐる緊張関係を歴史的に強いられ、今日も学力格差や教育格差をめぐる矛盾を抱えている。本研究は、ベトナム少数民族地域と沖縄の地域間共同により、ベトナムで盛んに導入が進められている学習者中心主義（**lay hoc sinh lam trung tam**）をめぐる議論に参加し、少数民族地域に根ざした教育方法を提案するとともに教員養成カリキュラム（現職教員教育を含む）に求められていることを明らかにする。具体的には、ベトナム少数民族地域の小学校をフィールドとし、授業研究の場をベトナム側小学校教員、教育研究者と日本側小学校教員と教育研究者が共有し、授業研究会を重ねながら課題に迫る。

３．研究の方法

(1)ベトナム教育改革をめぐる議論について文献に基づき、検証する。

(2)ベトナム北部山岳少数民族地域の小学校をフィールドとし、ベトナム側日本側双方が学習者中心主義に立つ提案授業を行い、ベトナム人教員や研究者とともに授業研究会を行う。

(3)ベトナムの教員志望の学生に対して集中講義やワークショップを行い、子ども中心主義の授業を体験してもらったり、理論を深めたりする。その上で、学生が山岳少数民族地域の小学校で観察実習や研究授業を行い、授業研究会をする。

(4)(1)(2)(3)を総合的に関連づけ、少数民族地域に根ざし、ベトナム教育改革の質的向上のための課題を導き出す。

４．研究成果

以下の４つの成果があった。

（１）少数民族の〈声〉を聴くことこそ、教育格差を克服する根幹となる。

日本の生活綴方的教育方法をワークショップで試みる中で、少数民族の中でもより深い困難を抱えたフモン族学生の内なる〈声〉と出会うことができた。

フモン族の学生 M さんは、小学生の自分をつぎのように振り返る。

> **私は村の小学校へ行きました。当時の鞄の中にはペンとノートしか入っておらず、教科書がなかったので他の級友たちと一緒に勉強していくのは大変でした。しかし一番辛かったのは心の中の寂寞感でした。**

貧困など厳しい生活を背景に、周りから「奇異な目」を向けられ、教室の中で沈黙と孤独を強いられ、「心の中の寂寞」に苦しみ、葛藤する様がありのままに綴られている。

また M さんは、ワークショップで多様な民族的背景の児童が通う新宿区立大久保小学校のビデオを視聴した感想をつぎのように綴っている。

> **それぞれの生徒たちがそれぞれの言葉を持っていても理解し合えるのですね。自分が将来教師になった時、どこで教えようとも、どんな環境下にあろうとも、生徒たちに寄り添って親身になれる**

人間でありたいと希望します。

「ありのままの思い」を表現するには、自分の存在がまるごと承認されている安心感がなければならない。そうした安心感を多数民族－少数民族という緊張関係の存在する教室や学校においてどのようにつくりだすか。すなわちどの子どもにとっても安心で居心地良く、自らの尊厳が尊重されていると実感できる場へと教室や学校をどうつくり変えていくかが問われる。

「子ども中心主義」の中心に位置するのは、子どもの〈声〉である。教員には、その〈声〉に耳を傾け、全人格的に対話する姿勢が求められる。「この子の世界をこの子に学ぶ」（岸本琴絵）という姿勢こそが、「子ども中心主義」の核心となる。マイノリティの子どもたちが、自らの尊厳が尊重されていると実感できる関係性を育み、その〈声〉を安心して表現でき、その〈声〉を聴き合い、相互理解を深めてこそ、自己や他者を尊重する姿勢や学ぶ意欲は生まれる。こうした関係性を、教室や学校でつくりだすことこそが、教育格差、学力格差を克服する根幹となることを明らかにした。その意味で、ベトナム語の学習者中心主義（**lay hoc sinh lam trung tam**）という概念を、子どもの尊厳に拠って立つ「子ども中心主義」という概念で捉え返すことの重要性も提起した。

大学の教員養成課程においても、少数民族学生の〈声〉（内なる思い）と出会い、互いに対話するカリキュラムを位置づけることが重要となるだろう。

（２）教育困難地域における教育実習の重要性―「子ども理解」を位置づけた教員養成カリキュラムの提起

今回、「子ども理解」から授業づくりを出発させることを大切に考え、僻地のトゥオンヌン小学校での観察実習（9 月）を位置づけ、そこでの体験をもとに 12 月、学生による研究授業を行うこととした。観察実習では、子どもに寄り添い、熱心に学習を支援したり、フモン族の学生がフモン族の子どもに自らの体験を伝え、自分の道を切り拓くよう励ましたりする感動的な場面がたくさん見られた。子どもたちも、同じ民族の大学生が教えてくれたり、励ましたりしてくれることに自ずと笑みがこぼれ、学習意欲が増し、別れる際には離れがたくて互いに涙を流す姿も多く見られた。12 月の研究授業のための訪問の際には、再会を喜び合う姿が見られた。

こうした僻地の小学校での実習は、学生、子どもたち双方にとってかけがえのない体験となり、将来、少数民族地域の教員となる学生にとっては教員生活の原点となるだろう。この報告を受け、タイグェン師範大学の Quan 学長は、カリキュラムにおいて山岳少数民族地域での教育実習を今後位置づける方針を明言した。このことが、第２の成果である。

（３）教育格差を克服する実践知の共有

共同授業研究会では、日本の小学校教員・善元幸夫が自ら培ってきたマイノリティの子どもたちの自尊感情の育成を中心に据えた教育の実践知を総動員し、クックドゥオン小学校にて授業を行った。また西岡尚也は、開発教育の研究会で使われてきた教具を活用し、その知見を踏まえた授業を行った授業研究会終了間際に、突然、校長は言いたいことがあるとつぎのように語った。

私が一つ確信したのは、善元先生が長い教員生活を通して日本も最初はいわゆる知識を一方的に注入する授業だったと。それを反省して、子ども中心主義に見直したということを聞きました。それを聞くと私たちもこれからもできるんじゃないかという確信が、今、少しあります。

すなわち、日本の教員も知識注入型授業観を反省しながら、授業観の変革を行っていったということを聞いて、「私たちもこれからもできるんじゃないか」との確信が生まれて

いったのである。感動的な場面であった。

実践知は、人と人との交流を通して伝播し、共有される。そのことを実感する場面がたくさんあった。このことが、第３の成果である。

（４）マイノリティの〈声〉を社会的メッセージへと転化するための教育方法の開発

今回のワークショップにおいては、日本の教育において、貧困を切実な課題とする地域で生まれた生活綴方的教育方法を提案した。すなわち自らの困難を抱えた生活や思いを綴り、そこに学び合い、課題解決を共同で探究する教育方法である。生活綴方的教育方法においては、「教科書を読む」ことではなく、互いの生活で学んだことを「本にする」学習が重んじられる。外から与えられた知識を学ぶのではなく、お互いの生活こそが貴重な学習材料となるのである。そして「本」にして発信することが、自らの地域への自尊感情を育み、他地域との相互理解を深めることとなる。

フモン族の Na Vi Vu さんはケーンの由来を綴った後、つぎのようにメッセージを書いている。

> **ケーンはフモン族にとって誇れる独特の文化の一つなのです。寂しいときも嬉しい時も、ケーンは自分の傍らにいてくれる“友だち”なのです。**
>
> **この物語を通して僕は子ども達全員に次のメッセージを送りたい。「僕たちは普段から自分たちの独特な文化と共生していくことで、文化を守り誇りに思うことができるのです。フモン族にも、他の民族と同じように平等に自由の権利があります。だから臆することなく自らの文化を大切にしていきましょう。**

フモン族の文化の誇りを拠り所に、少数民族の権利を伝えている。

「子ども中心主義」においては、生活に根ざし、発せられた〈声〉の表現が核となる。今回、その〈声〉が文字として綴られることよって、記録され、多くの人が少数民族の内なる思いと出会い、そこに学ぶことが可能となった。経済格差や構造的差別に起因する教育格差を克服していくためには、マイノリティの〈声〉が社会的なメッセージへと転化していく道筋が必須である。そのために、戦前の日本の貧困地域から生まれた生活綴方的教育方法は有効であろう。

一方で、〈声〉の表現方法は多様に保障されるべきである。今回は「綴る」のみならず、絵や布なども自由に用い、五感と認識とを総合的に表現する方法を採用した。どの民族も地域も、伝統的な手仕事として、布の文化（刺繍、織物など）が豊かである。学生による小学校での研究授業では、こうした布の文化（刺繍）を活かしたものも見られた。民族や地域に根ざした伝統的な文化も活かし、自らの思いや葛藤、願いを表現し、相互理解を深める表現方法が有効であった。

「この子の世界をこの子に学ぶ」ために、マイノリティの〈声〉を社会的メッセージへと転化するための教育方法として、①生活綴方的教育方法を伝え、その有効性を明らかにしたこと、②伝統的な手仕事や民族文化を活用し、自らの尊厳と思いの表現へとつなげる教育方法の開発が、少数民族地域では有効であることを提案したことが、第４の成果である。

（５）地球市民教育の実践的提案

今回、西岡尚也の大学での講義が非常に好評であった。国境を越えて居住する少数民族をめぐる課題を、地球市民の視点から照らし出し、共に考え合う視点を投げかけたことは意義深い。今後、「地域に根ざすこと」と「グローバルな視点から展望すること」をさらに統一的に探究していきたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）

村上呂里他「沖縄から学力格差をこえるペダゴジーを探究する」日本臨床教育学会『臨床教育学研究』第 2 巻、2014.4、56-74 頁,査読有

〔学会発表〕（計３件）

①MURAKAMI, RORI, Educational Issus from the Perspective of Dignity of Ethnic Minority：Comparison between Vietnam and Okinawa, “Reform of Learning,School,and Society”, Hanoi National University of Education, September 28-2014

②MURAKAMI,RORI, Reality and Educational　Reform in Japan, International conference “ Teachings curriculum Development Opportunities and Challenges”, Thai Nguyen University of Education. August 20-2015

③NISHIOKA,NAOYA、Teaching Methodologies of Geography (with demo lesson),　International conference “ Teachings curriculum Development Opportunities and Challenges”, Thai Nguyen University of Education. August 20-2015

〔図書〕（計２件）

①村上呂里編『日本・ベトナム共同授業研究の歩み－「教え込み」教育から「子ども中心主義」の学びへ』（明石書店、2015 年、270 頁）

②Murakami Rori 他『Tu giao duc nhoi nhet sang giao duc tich cuc』（フォレスト社、262 頁）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ
http://www.u-ryukyu.ac.jp/top_news/hot/research20110113/

６．研究組織

(1)研究代表者

村上 呂里（MURAKAMI，　RORI）
（琉球大学・教育学部・教授）
研究者番号：40219910

(2)研究分担者

那須 泉（NASU，　IZUMI）
（琉球大学・法文学部・講師）
研究者番号：20381204

西岡 尚也（NISHIOKA，　NAOYA）
（大阪商業大学・総合経営学部・教授）
研究者番号：60336360